わたしにもできた！ボランティア

所 属	桑名市立久米小学校	**実践者**	駒谷　奈津
対 象	小学4年生（79名）	**時間数**	全10時間
場 所	教室、家庭科室	**実践教科**	総合的な学習の時間
ねらい	1）エルサルバドルと肯定的に出会う。 2）エルサルバドルや世界の国々と自分たちがつながっていることを知る。 3）世界は支え合っていることを知り、誰かを支えるために自分ができる事を考えて実践する。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1	**Ⅰ エルサルバドルってどんな国なの？**（1時間） ①アイスブレーキング「夏の思い出」 ②フォトランゲージ「エルサルバドル？日本？」 【グループ活動＊1】 ③思ったことを伝え合おう。 【グループ活動】	*1 用いた写真 街中の様子、ﾌｧｽﾄﾌｰﾄﾞ店、日本車、民族衣装を着た子ども、冷蔵庫、食べ物
2	**Ⅱ エルサルバドルのコーヒーとわたしたち**（1時間） ①スライド＆絵本「コーヒーってどう作るの？」＊2 ②実習「エルサルバドルのコーヒーでコーヒーゼリーを作ろう」 ③ブレインストーミング「もしもロヤ病が流行し続けたら」 【グループ活動＊3】	*2 ﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄ資料、エルサルﾊﾞﾄﾞﾙで購入したｺｰﾋｰ絵本 *3 半模造紙、ﾍﾟﾝ
3	**Ⅲ ボランティアでつながる世界**（1時間） ①スライド「防災教育を拡げる日本人 ～エルサルバドルのBOUSAI」 【＊4】 ②講演「ボランティアに必要なもの」 【ゲストティーチャー＊5】 ③感想を書く	*4 ﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄ資料 *5 東日本大震災のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｽﾀｯﾌに来校を依頼
4	**Ⅳ 私にもできた！ボランティア**（7時間） ①前回の振り返り（感想の共有） ②派生図「身近にあるボランティア」 【グループ活動】 ③調べ学習「身近にあるボランティアを調べて知らせよう」 【課題別グループ活動＊6】 ④実習「私にもできた！ボランティア」 【地域のフェスタに募金活動で参加＊7】	*6 模造紙、ﾍﾟﾝ、資料、聞き取りのお願い *7 ｶｰﾋﾞﾝｸﾞ石鹸を図工で作成、ﾒｯｾｰｼﾞｶｰﾄﾞ、ﾗｯﾋﾟﾝｸﾞ

成 果	1）身近な教師が海外に行くことで、海外に興味を持ち、意欲的に学習に参加できた。 2）将来、海外に行きたい子、語学習得に意欲を持つ子などが現れ、キャリア教育にもつながった。 3）ただ、ボランティアをするのではなく、誰のため、何のために自分ができる事なのかを考えて行動ができた。
課 題	実際にエルサルバドルに行き、得たたくさんの情報や課題の中から、どこを切り口にどのようにプログラムを進めるが取捨選択が難しかった。また、自分たちができるボランティアの活動が募金活動になったことにより、特別な活動となってしまい、日ごろの自分の行動に直結しなかった事が課題として残った。
備 考	学年でプログラムを実施したため、隣のクラスとの連携が取れるようプログラムをできるだけ単純にした。4年生は国語や社会、道徳でも「誰にでも優しい社会」について学ぶ学年であるので、総合だけでなく、様々な教科において多面的に取り組みを進めた。

［授業実践の詳細］

1 時限目「エルサルバドルってどんな国なの？」

この時限のねらい

・エルサルバドルの様子を写真で知り、肯定的に出会う。

・友達とは同じ物事も違う視点で捉える時もあることを体験する。

1 子どもの活動の流れ

① アイスブレーキング「夏の思い出」
私が夏休みの間にエルサルバドルに行っていることを伝えていたので、インタビュー形式でビンゴカードを作り、楽しみながら友達のこと、教師の体験に興味を持てるようにした。

② フォトランゲージ「エルサルバドル？日本？」
10枚の写真を選んで1セットにし、各グループに1セット配る。エルサルバドルで撮られたものか、日本で撮られたものか話し合いをし、意見が分かれたものから順に発表をする。その際には、意見が分かれた理由を説明させた。結果を発表し、つぶやきを板書した。

③ 思ったことを伝え合おう
付箋の束を各グループに配り、「へー」（初めて知った）「え！」（意外だった）「なんで？」（不思議だな）の3つの観点を示し、どの写真の出来事についてそう思ったのか、付箋に「ずばり一言で」書いていくようにした。書いた後、グループでシェアをした。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 夏休み中にエルサルバドルについて調べた子どもたちにとっては意外な事が多かったようで、フォトランゲージの最中に本当に悩んでいた姿が印象的であった。悩むことで会話が生まれ、熱中して活動ができた。

◇ 発展途上国、自分の知らない国、という思い込みから、日本で見かけるようなものは何一つないだろうと思っていた児童が多かったため、現地で撮った写真に大変興味を持った様子だった。熱心に話を聞く子、気になった出来事を質問する子が大勢おり、エルサルバドルがこの一時間で身近に感じるようになったと思う。後日、サッカーの試合をテレビで見ていたら、エルサルバドル出身の審判がいた、と報告をしてくる子がおり、知らなかった国に目を留めるようになっていった。

3 使用した教材

＜教材1＞ エルサルバドルで撮ってきた写真10枚（カード形式に印刷したもの）
日本の製品、市場、自然、有刺鉄線と高い壁で守られた建物、冷蔵庫、中華料理店の様子、民族衣装を着女の子、食べ物、日本のアニメにはまる子ども達の様子

2 時限目「エルサルバドルのコーヒーとわたしたち」

この時限のねらい

身近なコーヒーを通して、日本と世界がつながっていることを知る。また、日本と世界のつながりは自分自身と世界とのつながりであることを実感する。

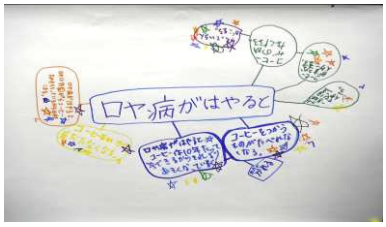
1 子どもの活動の流れ

① スライド＆絵本「コーヒーってどう作るの？」
エルサルバドルで購入したコーヒー農園の様子を描いた本を見せ、コーヒー豆が木になること、コーヒー豆は赤い

こと、たくさんの人が働いていることを説明した。その後、コーヒーのできる地域の気候条件や、日本ではコーヒーが栽培できないので、輸入に頼っている現状をパワーポイントのスライドで簡単に説明をした。特に、エルサルバドルを初め、コーヒー産出国ではロヤ病が流行し、コーヒー豆の収穫量が減っている現状を現地で撮った写真を使って丁寧に説明した。

② 実習「エルサルバドルのコーヒーでコーヒーゼリーを作ろう。」
エルサルバドルのコーヒー農園で購入したコーヒーを抽出し、コーヒーゼリーを作成した。

③ ブレインストーミング「もしもロヤ病が流行すると」
中心に「もしもロヤ病が流行し続けたら」と書き、このまま流行すると世界でどんなことが起こるかをグループで話し合った。



2 子どもの活動の成果・反応

◇ 1時間目でコーヒーに興味をもった子が多く、コーヒーの栽培方法や農園の様子に大変興味をもち、さまざまな質問が出た。たとえば、木によって豆の種類が違うのか、何種類くらいあるのか、コーヒーの実はコーヒーの香りがするのかなど。写真を使ったことで、より具体的にイメージができたようだった。また、何でもある日本が、実は輸入によって食材をそろえることができている現状などを知り、もし、世界の友好関係がうまくいかなかったら、日本は生き残れないかもしれない、と感想を書く子どももいた。

◇ ロヤ病により、コーヒーの収穫量が減っていることを知った児童たちは、グループで意見を出し合って「このままだとどうなるのか」について話し合えた。テーマが絞られていたことで、話し合いがしやすく、「このままだと困ることになるね。」という観点をもてた。10分ほどの話し合いで、「コーヒーが世界で減っていく。」「コーヒーが高くなって、みんなが飲めなくなる。」「コーヒーの奪い合いが起きる。」「農園の人が働けなくなる。」などの結論が出、いま、作ったコーヒーゼリーが将来では、食べることができなくなるかもしれない、と危惧を抱く様子が見られた。

◇ 身近なコーヒーを題材にしたことにより、世界と日本がつながっていることをイメージしやすかった。

3 使用した教材

＜教材1＞ エルサルバドルのコーヒー農園の資料本（現地にて購入）
＜教材2＞ コーヒー農園の写真

3 時限目「ボランティアでつながる世界」

1 子どもの活動の流れ

この時限のねらい

日本と世界のつながりは限定的なものではなく、人と人の助け合いでもつながっていることを知り、ボランティアに興味を持つ。

① スライド「防災教育を拡げる日本人
～エルサルバドルのBOUSAI～」
世界とのつながりは食品だけではなく、様々な分野でのつながりがある。今回は、エルサルバドルで見た防災教育のボランティアを手掛かりに、ボランティア（海外協力隊）という関わり方ができる事を学ぶ目的のスライドを作成した。スライドの中には何問かクイズがあり、相談しながら考えた。

② 講演「ボランティアに必要なもの」
東日本大震災の後、ボランティア活動に参加した方をゲストティーチャーに呼び、ボランティアの現状、ボランティアをしながら考えた事を中心とした講演を聞いた。講師との打ち合わせでは、この講演の後、自分たちでできるボランティアについて考えていくので、日本でよかった、お金で解決ができるんだ、という気持ちを持ってほしくないため、ボランティアをしながらご自身が感じた「人に寄りそう心」を中心に話をしてほしいとお願いをした。

③感想を書く。
短い感想を書いて、ペアで聞きあった。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 今回の活動は、今後、子どもたちが自身で行うボランティア活動つなげていくため、ボランティアとはどんなことか、また、ボタンティアで大事にしたい心にまで話題を拡げた。そのため、自分ごととして捉えきれない子どもが多くいたと思う。
◇ 子どもの感想の抜粋は以下の通り。ボランティアに興味を持った、やってみたい、今はできない、という感想がほとんどであった。

・私は今まで、ボランティアについて考えたことは無かったけれど、今日、初めて考えてみて、大事なことなんだと思いました。
・自分にとってたりないものとは、相手の心を想像すること。ボランティアでは大事なことなんだと思った。
・ボランティアは大切なことだし、もし、自分はお手伝いができなくても、世界に発信していくなど、これもボランティアの一つなのかなと思った。
・今、僕たちが遊んでいたり、勉強をしている間にも、困っている人がいるのに、ぼくは何もできないと思いました。

3 使用した教材

＜教材1＞ エルサルバドルで行われていた防災教育（ボランティア）の様子　スライド・パワーポイント
＜教材2＞ 東日本大震災で行われたボランティアの様子を伝える写真

4-10 時限目「わたしにもできた！ボランティア」

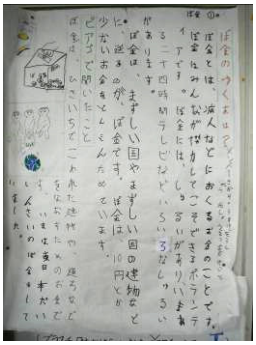
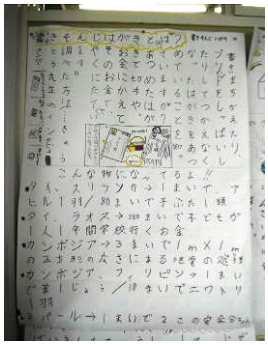
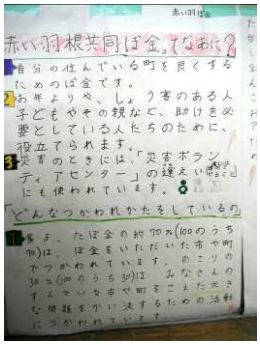
この時限のねらい

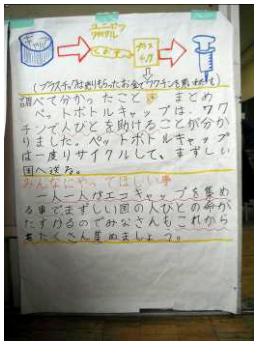
ボランティアは難しいことではなく、自分にできる事をし続けていくことだと知り、実際に行動に結びつけていく。

1 子どもの活動の流れ

① 前回の振り返り「ボランティアは難しい？！」
講演を聞いた後の感想では、ボランティアに興味を持てたが、多くの子が「今はできない。」「大人になったらやってみたい。」という感想を持った。本当に今はできないのか、大人にしかできないのか、検証し合った。結果、「募金ができる。」となったが、募金で使うお金は、自分が労働で得たお金ではないため、募金をしたいという気持ちは過ちではないが、なんだかもやもやする状態になった。
② 派生図「身近にあるボランティア」
そこで、身のまわりにあるボランティアについて知らないのではないか、という子どもからの意見をきっかけに、皆で調べ学習を行うことにした。まず、派生図をつかって、自分たちの身の回りにあるボランティアについて書き出していった。全体でのシェアでは、「盲導犬」「介助犬」「地震の募金箱」「ペットボトルのキャップ」「優先座席」「赤い羽根募金」「書き損じはがき」「青年海外協力隊」が挙がってきた。この中から調べたいことを選択し、グループを作って調べることにした。
③ 調べ学習「身近にあるボランティアを調べて知らせよう」
調べる観点は「誰のための」「どんな」ボランティアなのかをはっきりさせるようにした。子どもたちは学校で見たことのある、赤い羽根募金やペットボトルキャップ収集、書き損じはがきに興味を持った。この事柄は本では調べきれないため、学校の窓口である教頭に依頼し、インタビューを受けてもらうようにした。ペットボトルのキャップ収集については、窓口となっている教諭に依頼し、インタビューを受けてもらった。一方で地域のスーパーなどで見た募金活動に興味を持つ子どももいた。そこで、地域のスーパーにお願いし、インタビューを受けてもらうよう、依頼した。放課後にインタビューをしに行った。

青年海外協力隊については、本校に経験のある講師がいるので、その方に協力をお願いした。また、ボランティアは教室でもできるのではないか、と考えたグループがあり、学校や教室できるやさしい活動について考えるグループもあった。
調べ学習が2時間、まとめる作業が2時間の計4時間。全グループB紙2枚以内という制限を設けた。発表は、グループ発表を行った。



④ 実習「カービング石鹸を作ろう」

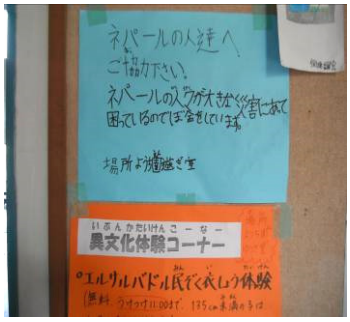
調べ学習が終わったあと、最初に検討した「募金活動はボランティアといえるのだろうか」という問いをもう一度検討した。話合いを重ねた結果、24時間テレビのように、自分たちが募る側になればいいのではないか、というアイディアが出た。実は、この活動を始める前、この学年に、地域で開催されるお祭りにカービング石鹸（石鹸に彫刻等で模様等を彫りこんだもの）をつくって募金を募ってほしいという依頼がきていた。子どもの様子を見て、意欲的にボランティアに取り組みそうであること、自分たちがこの活動をすることで誰かの助けになると見通しが持てることを確信し、依頼を受ける事を子ども達に相談した。子ども達は全員、やってみたいと答えた。石鹸を彫り、ラッピングをし、メッセージカードを添えた。2時間でこの活動を終えた。子ども達と話合い、ネパールの地震に苦しむ人たちへの募金を集める事にした。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 視覚支援（パワーポイント）により、エルサルバドルがどこにあるのか理解する。
◇ 最初はボランティア活動に対して漠然としたイメージしか持てていなかったが、身近にあるボランティア活動を調べたことで、思っていたよりもたくさんのボランティア活動があることに気付け、自分にもできるかもしれないと思うようになった。
◇ 安易に募金をしたらボランティア活動になる、という考えは避けたかったため、子ども達と何度も考え合った。最終的には、自分たちが募金活動をしてみよう、とつながった事は一定の成果だったと思う。お祭り当日には参加できない、という子が、「ボランティアができない。」と訴えてきた時も、「自分にできる事をするのだから、石鹸を作ることもボランティアだよ。」という子がおり、自分でできることをしよう、という気持ちを最後まで持ち続ける事ができた。
◇ エルサルバドルの学習が始まる前から地域の募金活動参加の依頼が来ていた。そのため、エルサルバドルからボランティア活動まで結び付ける時間が制限されたこともあり、各活動のつなぎ目が雑であった印象がある。しかし、子ども達はよく考え、意欲的に参加してくれたので、短い期間だからこそ集中してできたのではないかと思った。

地域の祭りへの参加、当日の様子について

我が校の地域の祭りは日曜に行われる。授業日ではなく、よって子ども達も自由参加となる。子の時間は今回のプログラムの時数には入っていない。当日は写真のようにブースを作り、活動を行うことにした。募金を呼びかける係を募集したところ、クラスのほとんどの子どもが（用事や地域のクラブ活動で来られない子を除いて）やりたいといい、時間で区切って交代で呼びかけるようにした。中には1時間ほどブーにとどまり、呼び掛ける子もいた。地域のケーブルテレビの取材も受け、地域に活動が紹介され、子ども達の達成感にもつながった。



■ 全体を通して

「エルサルバドルに行ってきます。」と言った時の子どもの反応は、「先生、帰ってきたら、いろんなことを教えてね！」だった。現地に行って、青年海外協力隊やシニアボランティア、専門家の方々が現地の方の生活や考え方、心に寄りそいながら支援活動をされている様子に心を打たれた。エルサルバドルの研修では、エルサルバドルのことを考える、というより、エルサルバドルの事を考えるその思考過程は、共に過ごす仲間の事を考えることと同じ、と考えるようになった。そこで、「いろいろなこと」は「ボランティア」にしようと心に決めて子のプログラムを作った。当初はしっかり考えて行動できていたが、日常生活に活かせているかと言えば難しい部分がある。子ども達にはボランティア活動時だけではなく、仲間の心に寄りそいながら学校生活を送ってほしいと願っている。

1 授業の様子

＜コーヒーゼリー作りに熱中＞

＜エルサルバドルのエプロンを付けて募金呼びかけ＞

＜テレビの取材を受けている子＞

＜授業ではないですが職員にも研修しました＞
ププサを作って食べる会

2 参考文献・資料

1）小幡小学校アクティビティ集4　2014年度版
2）統計資料　全日本コーヒー協会　www/coffee.ajca.or.jp/data
3）世界と日本のコーヒー豆事情　　AGF　　www/agf.co.jp